

法令より見たる津輕藩の町人の生活（下）

黒瀧 十二郎

目次

はじめに

一、町人に対する生活規制

二、衣食住について

(一)衣服の規制

(二)食・住の規制（以上、前号）

三、年中行事と生活（以下、本号）

(一)宵宮

(二)盆踊り

(三)ねぶた

(四)お山参詣

四、日常生活

(一)弘前城下の通行

(二)商業について

(三)質屋と藩士

(四)防火・治安対策

むすび

三 年中行事と生活

年中行事には全国的共通の行事と津輕領内独特の行事があり、また前者に領内のカラーが強く加わった行事も見られる。

当時の社会は士・農・工・商と身分階層の別があり、衣食住をはじめ日常生活の様式・意識ともに大きな違いがあったとしても、弘前城下の行事は階層相互のかかわりで催されてきたのである（特別な行事を除いて）。これらの行事の中で法的規制が比較的多く見られたものを取りあげ、町人の生活を考えてみたい。但し、正月の門松については、町人に対する規制が藩士に対するのと同様であり、既述してあるので、本稿では重複をさけるために省略する。¹⁾

(一) 宵宮

宵宮（夜宮）は神社の祭典の前夜祭で、神霊が来臨してはじめて祭が成立する。その来臨は夜間に於いて行われると信じられたので、宵宮が

重要であった。

江戸時代は夜の行動が規制されていたが、宵宮には人出が多くにぎやかであった。それは騒ぎや飲酒が認められ、レクリエーションも兼ね、また年に一回、親類や仲間、近所との交流が行われたからでもある。^②

延宝九年の「町人法度」第二十四条（拙稿 上△前号▽ 参照）には、宵宮か本祭かは明らかではないが、神事祭祀を質素にするべきことが見える。

「弘前藩庁日記」^③ 明和七年閏六月十一日の条に左のようにある。

一、所々夜宮之節、喧嘩口論等間々有之段相聞得候、必竟近年所々徒者多有之故右躰之儀可有之候、以来夜宮并七夕祭盆中之儀、喧嘩口論之者有之候ハハ、見当次第理非無差別搦捕候様申付候、此段当番通用可被申触旨御目付江申付之、

右によれば、宵宮の場所が城下か周辺の農村なのか、いかなる身分の者が対象とされたのか判然としないが、喧嘩口論に及んだ者を捕えるよう指示されたものである。これは行事が盛んになってきたことを推測し得るが、風紀肅正を意図したものである。

「日記」天保二年七月三日の条に次のように見える。

一、今日御目付触左之通、

覚

近年盆踊并処々夜宮江^{（廿）}莊年之婦人多罷出候由、以来婦人之儀者、商人之外夜分参詣并盆踊等江決而罷出不申候様、（下略）、（傍註筆者）右によれば、女は町人の女以外に盆踊りや宵宮参りに出ることが禁じられている（「日記」弘化三年六月二十八日の条にも見える）。それは、

城下の風紀の乱れの矯正を一層強く求めたものであろうが、幕末に至り町人と藩士を区別して身分秩序をあくまで維持せんとする方法の一つでもあったと考える。

宵宮の際に、町人が神社へ立花・人形・飾物等を寄付することを禁じられているのは、すでに「日記」天保十三年三月二十九日の条に見えるが、「日記」嘉永七年六月三十日の条が詳細なので左に示すことにしたい。

一、町奉行申出左之通、

所々夜宮之節飾物并七夕祭盆踊等之締向可申上旨、旧臘被仰付之趣評議申付候処、別紙之通申出、然ニ夜宮之節人形等之飾物、近年御差留被仰付候後右躰之儀無之、当時生花立花之類而已ニ而、町々割合等差出候儀無之由ニ付、左迄差障之筋茂無之候間、是迄之通可被仰付哉、其外格別大振之幟并燈籠等奇^{（寄）}附いたし候町々茂有之ニ付、右様之儀押移候而者締合ニ相拘候間、差留可申付奉存候得共、神社江之奇^{（寄）}附ニ付先是迄用奉候分者、夫形以来右様大振之幟并燈籠等致寄附候儀、堅差留可申付与奉存候、

但夜宮之節、其町内之者共、過分之酒肴取陳客来いたし、無益之奢有之旨、右ニ倣小者共迄終夜飲合、色々之者共寄集、後々喧嘩致口論御扱ニ相成候儀間々有之候間、旧臘被仰付候趣急度相守、心得違之儀等無之様可申付奉存候、（下略）、（傍註筆者）

これは町奉行からの申し出で、宵宮の時に(1)神社へ人形等の飾物、大きな幟や燈籠を寄付することは厳禁、(2)その町内の者が、客を集めて夜通し酒を飲み、喧嘩・口論に及ばないこと、が述べられている。大要の二点は、「日記」に記されていないが承認されたと思われる。したがっ

て次のようなことがいえよう。

幕末には宵宮が町人の寄付によって盛大に催されてきていることが知られる。一方、藩財政の窮乏により藩士で生活困窮に陥る者が出てきているのだから、藩体制維持のため、藩士に影響を及ぼさないよう、町人に対して質素儉約と風紀を乱さないことを求めたものと考えたい。

(一) 盆踊り

盆行事では七月一日が盆の朔日、十三日は墓参り、二十日は送り盆とした。⁽⁵⁾ 盆踊りは全国至るところに見られるが、寺や神社の境内、広場や辻などで老若男女が群集して踊る。それは盆に迎えた祖霊を慰め、再びあの世に送るためのものといわれる。村人にとっては盆の休みの共同娯楽であり、秋の豊作の祈りもこめられていた。

盆踊りの期間は、全国的には七月十三日から十六日迄である。弘前城下では「日記」元禄二年七月十一日の条によって、十三日の晩より十六日の晩迄であつたと考えられる。「日記」文化十四年十二月十日の条に次のように見える。

一、在方盆踊之儀、一統廿日迄ニ御座候得とも、賀田村之儀者弘前近所ニ而大場同様之場所故、七月十七日之後弘前并所々々踊見物ニ罷越候者も有之処方口論等御座候に付、以来賀田村之儀者七月十七日限ニ而踊御差留被仰付候様、左候者郡奉行・町奉行ニ而夫々可申付旨沙汰之通申付之、

右によれば、農村での盆踊りの期間は七月二十日迄であつた。城下に近い賀田村には、踊り見物の者が出かけて行つて口論などの争いも見ら

れた。そのため賀田村は、城下と同じに十七日迄とするよう申し付けられている。断片的な二つの史料から断定はできないが、弘前城下での盆踊り期間は農村と異なり、七月十三日の夜から、十六日か十七日の夜迄であつたと思われる。

町人・藩士を対象に、盆踊り等の行事が催される期間中の心がまえが「日記」元禄二年七月十一日の条に見え、踊りの服装が華美にならないこと、礼儀をかけた行動を慎しむこと、喧嘩の禁止、木戸を閉める時刻等が規定されている。毎年のようにこの時期に注意の達が出されており、それは風紀の乱れを防止するためであつた。

「日記」天保二年七月三日の条によれば、(一)宵宮の項で盆踊りについても述べたように、女は町人の女以外に盆踊りに出ることが禁止された。「日記」弘化三年六月二十八日の条にも見える。

「日記」嘉永七年六月三十日の条に左のようにある。

(上略)

一、盆踊之儀者、子供等斗ニ相限候与申儀ニ茂無之、勝手次第踊候様古来方之儀ニ有之候得者、此度改而子供等之外踊御差留ニ而者人氣不穩儀与奉存候、尤衣類等ニ至迄美麗構敷儀無之様、年々私共ニ而町中江相触置候ニ付、是迄之通被仰付候様、尤前々敷御差留被仰付罷有候処、心得違之婦人共有之、男姿ニ而踊子江入交歩行、是等喧嘩口論之基ニ付敷敷差留申付、若心得違之者有之候得者、当人者勿論同行一統敷敷締方可申付旨可申触与奉存候間、向々江茂被仰付候様、

勘定奉行点羽、

○ケ条町方斗ニ相限候儀ニ者無御座候間、御家中并九浦江茂被仰付候様、

但白昼往来いたし候踊子茂有之由ニ付、右躰之儀無之様可申付奉存候、

これは、(一)宵宮の項で引用した同年月日の条に見える史料の一つで、藩が許可したものと思われる(「日記」安政六年六月二十七日の条には、右の条を要約した内容で、目付よりの触として示されている)。

内容は(1)衣類は華美にならないこと(儉約令)。(2)男装して踊りに参加している者があり、喧嘩・口論のもとになるので厳禁する(風紀の乱れ防止と身分秩序維持)というものである。

前述したように、盆踊りへの女の参加は、町人の女以外は認めないよう規制されていた。その後、藩士の女が男装(町人や農民の女が含まれていないとは言いきれまい)として参加していることが判明し、次の対策としてこのような規制になったものと思われる。

かくて幕末に至り、藩では盆踊りに対する規制を徹底できず、身分秩序の維持という点からは、封建社会が崩壊に瀕していたことを認めざるを得ないのである。

(三) ねぶた

「ねぶた」は七月一日から七日まで、現青森・秋田両県などで行われる飾り物行事である。⁽⁷⁾

ここでは弘前城下に於ける「ねぶた」について述べることにする。最古の記録は「日記」享保七年七月六日の条に見える。この日に、五代藩

主津軽信寿が織座に出かけて、町印のついた一番から八番までの「ねぶた」が紺屋町から春日町へねり歩いて行ったのを観覧している。

藩士は正式に参加できないので仮装して出たらしい。⁽⁸⁾「ねぶた」は町人の行事だったのである。津軽の眠り流しが次第に一般化して、「ねぶた」という燈籠祭としての形式が整ってきたのは享保頃といわれている。⁽⁹⁾幕末の天保五年七月七日に藩主(十代信順)が上覧した際の「ねぶた」は、見物人はおびただしい数にのぼり、物々しい警戒のもとに運行された。⁽¹⁰⁾これらは大人による運行と思われる。

「ねぶた」の際には些細なことから喧嘩が始まり、負傷者が出るなど次第にエスカレートしていったようである。

「日記」安永八年七月十一日の条に次のように見える。

一、例年祢ふ多流之儀、町々斗之儀、近來御家中子共入交候故喧嘩口論等有之候に付、向後御家中幼少之子共銘々屋敷内ニ而祢ふた流之儀者勝手次第、門外江出候儀者停止ニ被仰付候、勿論町々茂町内切に而他町江出候儀堅無用、祢ふた流之節木脇差たり共差申間敷、棒蒿口等持出候儀停止ニ申付候事、(下略)、(傍註筆者)

右によれば、子供用の「ねぶた」に藩士の子供が加わり、喧嘩・口論等になっているので、今後(1)藩士の「ねぶた」は屋敷内だけとし、門外に出ないこと。(2)町人にはその町内のみ運行を許可し、木の脇差を腰にさすこと、棒や蒿口を持ち歩くことは認めない。というものである。これは風紀の乱れを防止するために出されたものであろう。

「日記」天保十三年六月二十二日の条に左のようにある。
一、今日御目付触左之通、

覚

祢ふた之儀ニ付、度々御触出茂有之候得共、兎角不締之儀有之ニ付、以来左之通、

一、前々町々斗之処、近年御家中壮年之子弟并召使之もの入交候故、

喧嘩口論ニ及、不埒之至ニ候、以来幼少之子供等、町内限ニ而祢ふ

た差出候儀者格別、他町江往来不致候様、(下略)、

これは、町人の子供用の「ねぶた」(町内だけの運行)に壮年の藩士及び召使の者が参加して、喧嘩・口論に及んだことに対する規制である。

さらに「日記」弘化三年六月二十八日の条に次のように記されている。

一、今日御目付触左之通、

覚

ねぶた之節、近年ニ至壮年之婦人多罷出、猥ケ間敷趣相聞得候、見

物不相成与申儀ニ者無之候得共、無焼灯ニ而往来不致候様、(下略)、

右によれば、大人用か子供用の「ねぶた」か判然としないが、壮年の婦人(身分階層不明)が運行に参加して、風紀が乱れていることに対して出されたものである。

以上のことから注意すべきは、子供用の「ねぶた」は藩士―屋敷内で行ない門外に出てはならない、町人―その町内だけの運行とする、と規制されていた。それにもかかわらず、町人の「ねぶた」は他町へも運行された時があり、壮年の藩士も参加し、さらに女性さえも加わって、喧嘩・口論が始まり、「ねぶた」の期間には風紀が乱れていたのである。その防止のための規制であった。これは藩政後期の「日記」には枚挙に遑がない。

喧嘩の理由は、藩士の二・三男は、ふだんから部屋住みの厄介者として冷遇されていたので、この機会にこれまでのうっぶんばらしのために暴れ廻ったのだろう。⁽¹¹⁾という。

しかし、幕末になると藩財政の窮乏が一層深刻化し、それによる藩士の生活困窮は、財政的に富裕となった町人階級に対する不満となつてあらわれた一面もあることを考慮すべきであろう。

(四) お山参詣

岩木山は津軽領内すべての人々にとって、古くから信仰の対象であつたことはいふまでもない。

毎年八月一日(八朔)に、部落ごとに集団で、豊作祈願のため登拝行事が行われる。これを山カケまたはお山参詣といい、津軽最大の祭りであつた。⁽¹²⁾これについての法令は農民・町人宛のもので、町人の登拝も行われていたことが知られる。右の祈願のほかに領内の安穩と領主の延命長寿への願いがこめられていた。⁽¹³⁾

登拝行事の期間は「日記」明和七年八月十日の条に、

一、郡奉行・九浦町奉行江被仰付候趣左之通、

覚

例年八月朔日百沢寺為御代参登山之節、引続キ在町之者参詣致候由、

(中略) 尤例年登山之儀八月朔日より十五日まで御定に候、以後之儀右之通可相心得候、(下略)

とあり、八月一日から十五日までであつた。

「日記」天明三年八月十日の条に見える御目付触によれば、差障りがあ

という理由で八月中の登山を禁止している。この年は天候不順の大凶作で、岩木山の崇りを恐れたことによるものと思われ、天候と岩木山信仰との深い関りが考えられる。

服装は、天明八年から翌寛政元年までに記録したもののいう『奥民図彙』に「思々ニ対ノ衣類ヲ着ス、多クハ紅染ノ木綿ナリ」と見える。それより以前、「日記」明和七年七月十八日の条によれば、近年華美になっているので、そのようなことがないよう規制されている。⁽¹⁴⁾

さらに「日記」嘉永六年十二月十七日の条に、次のように記されている。

一、今日郡奉行・町奉行・九浦町奉行江相渡候書取左之通、

覚

(中略)

一、岩木山登山之節、目立候花美之衣類廻并幡幣束等迄大振ニ無之様、

其外惣而異風を相好無用之費不致候様、(下略)

右によれば、「日記」明和七年七月十八日の条と同様に、華美な衣服を規制する儉約令であった。したがって、紅染の木綿の衣服は従来通り許容されていたものと推定され、白装束の行者姿が多く見られるようになるのは、明治以降であると思うのである。

登山と下山後に於ける行動については、次のように規制されている。

「日記」安永七年八月二十三日の条に、

(上略) 当年も山中之橋立与申所迄女も登山致候由、勿論遊女跡之女同道之者も有之よし相聞得候、以来右跡猥構敷儀無之様急度可被申付旨、郡奉行・町奉行・九浦町奉行江も申遣之、

とある。これは遊女のような女までも伴った登山に対する禁止令であり、「日記」文化七年八月四日の条にも、若い女が混った登山に対してのものが出されている。

下山後の行動については、「日記」天保十三年七月二十二日の条に左のようにも見える。

一、在町之もの共、岩木山江参詣ニ罷越、帰之節途中往来之見物人者勿論、在町家江猥ニ入込大勢踊立、色々悪徒等致候旨無相違相聞得甚不埒之至ニ候、以来右跡心得違之もの無之様、此旨厳敷可被申付旨町奉行江申遣之、郡奉行江者口達ニ而申付之、

右によれば、路上の見物人に対するいたずら、道沿いの家に飛び込んでの悪ふざけなどに対する禁止を申し付けたものである。同様なのは「日記」弘化三年六月三十日の条にも見える。これは下山後の解放感と、御神酒を飲んで多少自制心を欠いた結果によるものであったと思われる。

以上のことから、お山参詣に対する法的規制は、儉約と風紀の乱れの防止を求めているものであったと考えるのである。

四 日常生活

本章では日常生活全般に互って法的規制を述べることを目的とせず、城下に於ける生活のいくつかの場面に對して、法的規制が比較的多く見られたもの、或は法的規制で注意すべきものを取りあげ、町人の生活と社会との関りを考察したい。

但し場合によっては、藩士・農民・寺社との関連で述べることにする。

(一) 弘前城下の通行

藩政中期以降城下の町屋で最も賑いを見せていた地域は本町であり、ついで亀甲町・土手町・和徳町方面であった。これらの町を中心として多くの人々が城下を往来していたのである。

最初に藩主の行列が通る場合を見る。「日記」文化八年十二月二十三日の条に左のようにある。

一、被仰出之寛左之通、

一、何方江御成之節ニ而茂、御先拂足輕是迄ひつこめ与申唱来候得共、已後下ニ居連与可申旨被仰付候、(中略)

一、何連江御成之節ニ而茂、御家中ならひ町家共ニ御駕籠御行過之處にて直ニ門戸越明候振合候間、下夕に茂不罷有、御駕籠御行過之所ニ而、直様立候振合ニ而、甚不宜候間、已後中押行過候処ニ而門戸を明ケ、是迄之振合ニ相心得候様被仰付候、何連御見通シ等之処ニ而者無調法等無之様、御家中并町家共、右之通相心得居候様被仰付候之間、御書役江口達ニ而申付之、

一、右之趣ニ而今日御目付申付候之事、

右によれば、藩士・町人が藩主の行列に出会った際に心得ておくべきことは、(1)先払いの足輕が、これまで「ひつこめ」と叫んできたが、今後は「下におれ」⁽¹⁶⁾と唱えるよう変更になったこと、(2)行列の最後尾が通過後に、隠れ慎しむために閉鎖していた門戸を開けることである。

藩主が通って行く道路上及び道路沿いの家屋で、藩士・町人が無礼な行為をしないように、とるべき態度が知られる。このような法令は幕末まで再三出されており、階級社会に於いては当然のことであった。

次に町人が路上で藩士に出会った際にとるべき態度である。⁽¹⁷⁾「日記」延宝三年二月十六日条に、

以条目御町奉行江申渡覚

一、御町人平日士中に参会之節名を様と呼可申事、陰にて名を申にも様と可申事、少身之衆中たりとも殿と申儀為無礼事、

一、御町人諸士に対し、路次にてへりくたり跪可申事、(下略)

とある。町人は藩士に対して「様」と申し上げて敬意を表し、路上で出会った時に跪いて挨拶をしなければならなかったのである。

そのほかに一・二例を示すと、藩士が通る時に町人が店頭で腰をかけ又は横になっているなどの無作法な態度を慎しむこと(「日記」元禄十五年七月八日の条)。店頭で煙管や楊枝をくわえ、或は頭巾を被って立腰でいるような態度をとらないこと(「日記」宝暦二年七月七日の条)があげられる。

このような礼儀作法を守るべき規制が、藩政期を通じて幕末まで出されているのは、延宝九年制定の「町人法度」第十五条が厳守されていなかったことを意味しようが、藩が身分秩序をあくまでも維持しようとするためであったと考える。

勿論、路上で出会った際の藩士間にも、上下の階層秩序を守るための規制が、「日記」に散見され、幕末まで実際には厳守し得なかったことが推定される。

第三に道の整備についてである。悪路が城下の通行の妨げとなっていたので、屋敷前の道を自分で整備すべきことが、すでに「町人法度」第二十七条に規定されている。

これについての具体的な法令が寛政期から見えるのは、津輕藩の寛政改革で実施された藩士土着制と深い関りがあると思われる。

『日記』寛政十二年三月十日の条によれば、次のように見える。

一、今日御目付触左之通、

覚

御家中并町々共、街道銘々屋敷前掃除方并水道堰穿通手入致候儀、前々御定有之処、先年御家中在宅以後色々転宅等有之、是迄不手入ニ相成、水道堰穿通無之故、街道水湛相成、春秋者勿論雨天等之節、往来甚難儀相成候之旨相聞得候間、以来銘々屋敷前急度致手入候様、

一、新割町之内水湛或者湿地等ニ而不得止事場所者、去々年屋敷方ニ而新堰穿通し御手入等も被仰付候得共、弘前廻町々一円御手入方之儀者、不容易之儀ニ付、難被為行届候之間、以来前々之通銘々屋敷前掃除并水道堰穿上坊上等迄不怠自分ニ而手入致候様、尤未在宅ニ而上弘無之族ニ而も拝領屋敷前並合之通手入致候様、無左候者其所水押上り町並一統之及迷惑候間、雪消次第早速水道堰穿通候様、尚又小路等者別而不手入之旨相聞得候間、前書之通手入致候之様、若不手入之族於有之者、屋敷奉行ニ而急度相糺候様申付候、此旨可被申触候、以上、

三月

御目付中

右によれば、町人・藩士に対して屋敷前の道路の掃除や手入を命じたものである。特に藩士の在宅後に侍町では道路が荒廃し、雨が降った

時には水がたまり、往来の妨げになっていたことが知られる。

城下では町屋と侍町が区別されているが、道路の往来は比較的自由であつたようである。⁽¹⁸⁾ 寛政十二年以後幕末まで、町人・藩士に対して屋敷前の道路の整備についての法令が繰り返し出されている。

寛政五年より実施された藩士土着政策は、同十年には失敗に終り、藩士は旧来通り城下へ居住を命じられ、享和元年までに在方引上げは完了した。⁽¹⁹⁾ それにもかかわらず、道路整備について同じような命令が『日記』天保九年八月二十九日の条にも見えるのは、藩財政の窮乏によつて家屋の補修すら出来ない生活困窮に陥っている藩士が、⁽²⁰⁾ 屋敷前の道路の整備まで手が廻りかねていることを示すものと考ええる。

(二) 商業について

弘前城の築城に伴う城下町の発達によつて、町屋は商人町・職人町として区画され、特に本町は藩政中期以降商業の中心地域として発展をみた。ここでは本町を中心に考察することにした。

享保四年頃の「町屋数円」によれば、本町一丁四丁目までは大坂屋・大黒屋・練屋・吉野屋・敷屋・若狭屋など屋号のある商家が多く、五丁目は小規模な町家が並んでいた。⁽²¹⁾ 宝暦六年の「本町支配屋舗改大帳」によると家数は一〇〇数えられ、⁽²²⁾ 明治初年の『新撰陸奥国誌』には「家数合て百七十二軒。この町呉服店多し、酒肆茶店洋貨舗等あり」と記され、⁽²³⁾ 城下の代表的商家街であつたことが知られる。

『平山日記』⁽²⁴⁾ 宝暦四年の項に、本町について左のように記されている。

弘前本町共に子年焼失已来殊之外寂寥^{ヤミシラ}相成候処、此度本町之外木綿

絹布商売御停止に付、外町並在々之木綿商売之族多出店し候、此節より殊の外蕃昌ス、(下略)

「子年焼失」とは、本町一丁目〱五丁目のほかに大工町・親方町・土手町等へと延焼し、二〇〇軒余が焼失した延享元年の大火のことである。⁽²⁵⁾このため本町は衰微したと思われる。藩では宝暦四年に本町以外で木綿と絹布の販売を禁止したので、本町内に开店する商人が多く集まり、再び町内が活況を呈するに至ったことが知られる。

「日記」宝暦十三年二月八日の条に次のようにある。

一、本町商人共近年不商及潰ニ見世店を相仕廻御町並見苦敷御座候に付、御取立願之儀紙面之通申出候間、御用達共江も相尋候処、何連も差障り有之旨紙面之通申出候、全鉢衰微之儀ハ本町ニも限り不申、去ル亥之年凶作以来御郡内一統之衰微罷成候得者御町並ニ拘り不申候間(中略)、本町之儀者差当り難立引相見得、弘前随一之御町並及潰候而者他所之見聞も不宜(中略)、
(本町)

一、右に付当町并九浦在々江相触候趣左之通、

覚

絹布木綿細物太物商売人儀、是まで之通町〱勝手〱に徘徊商売仕候而者差障之儀有之候に付、弘前者本町に限り商売仕候様可被仰付候得共、差当り右之通被仰付候而者難儀之者も可有之、然共往々右之通にてハ御差障り不得止候間、以来右商売方之儀左之通申付候、一、本町一丁目より五丁目限り住所商売之儀、并他町徘徊商売之者も本町より出店之分ハ是まで之通勝手次第、其外諸代物本町より買受商売致候様、

一、在々之儀 藤崎村 板屋野木村 五所川原村 木作村 金木村 飯詰村 尾上村 油川村 三馬屋村

右九ヶ所之分ハ是まで商売仕来候者ハ勝手次第商売候様、右之外村々にて商売之儀停止に申付候、尤弘前本町江出店之儀ハ勝手次第申付候、

一、浦々之儀者はまで之通勝手次第、尚又是まで右九ヶ村江出店等致罷有候者ハ是まで之通、此末弘前本町之外出店等ハ停止に申付候、

一、両浜并浦々にて旅人積下シ荷物商売方之儀、船上之上問屋手先を以卸売買之儀ハ是まで之通勝手次第、弘前本町之外にて旅人見世店を飾り自分卸売小売商売之儀ハ小問物類たり共停止に申付候間、弘前問屋付たり共本町之外にて商売堅ク致間敷候(下略)、(傍註筆者)

右のことから、城下第一の商家街である本町が、衰微の状態から活気をとりもどすための対策が知られるのである。「日記」によれば、宝暦期以後幕末まで、藩では再三にわたり他地域での絹・木綿等の販売を規制して本町の繁栄をはかっている。

元禄八年の大凶作後、次第に財政の窮乏化がすすむ藩では、豪商の御用金上納に頼ることが多くなってきたことはいうまでもない。藩領内で本町だけに豪商が集住していたわけではないが、藩財政が豪商に強く依存している関係から、城下のメインストリート本町の殷賑は藩の豪商保護の政策として強くうちだされたものであったと思われる。

次に物価の引き下げについて述べる。「御用格」(寛政本)第十三「被仰出之部」天明八年十二月九日の条によれば、次のように見える。⁽²⁶⁾

近年諸商売之品高値ニ付、度々御触有之処、銘々勝手之申分相募甚無

法之至候、依之上方より候品并他領より入候品、是迄直段より一割通直段引下ケ、御國産之品ハ二割通直段引下、在方より出候品々分は三割通引下ケ、(中略)郡奉行・町奉行・九浦町奉行江被仰付之、右によつて、商品は上方及び他領産は一割引、國産品は二割引だが、在方の産は三割引にするよう、領内に命じられたものである。

この外に、右とほぼ同内容のもの(「日記」寛政元年三月十一日の条)、木炭・薪の値下げ(「日記」寛政元年五月二十五日の条)、釘・鉄の値下げ(「御用格」寛政本第十三「町奉行之部」寛政三年五月二十日の条⁽²⁷⁾、「日記」寛政三年八月二十日の条、「日記」同年九月二十日の条)が見える。

さらに「日記」寛政四年九月十五日の条によつて、領内の全商家に家業札を掲げさせたことが知られる。同五年六月には隠商を行なつた際の過料について十六カ条が定められ、続いて同六年八月の三カ条、同七年十一月の三カ条が見える。右の合計二十二カ条は、寛政八年二月、藩の戸数方により「隠商過料定牒」⁽²⁸⁾として作成された。

右述により、物価の引き下げ、家業札を掲げること、隠商に対する過料定め、の諸法令が寛政期に集中して見られることは、津輕藩の寛政改革に於ける政策の一環として出されたものと思われる。

寛政初年の物価の引き下げに関する法令は、藩士が生活困窮に陥ることなく、農村復興のための土着が順調に行われることを考慮して、町人の経済活動を抑えた面があると考えたい。

また家業札を掲げなければ商売できないようにし、隠商防止のための過料を定めたことは、藩士が商品経済にまきこまれて苦しむことなく、

土着制が推進されることを考慮した一面があるろう。したがつて両者とも町人の経済活動がある程度抑えようとしたものである。

以上述べたことから、本町の繁栄をはかる法令は、藩財政維持のため豪商を保護しようとするものであつた。また物価引き下げの法令及び隠商に対する過料定めは、藩士の生活が商品経済に巻きこまれて藩体制が揺らぐことを防止するため、町人の経済活動がある程度抑えようとした面があつたものと考ええる。

(三) 質屋と藩士

質屋についての規定は、「御用格」⁽²⁹⁾(寛政本)第十三「被仰出之部」元禄三年正月二十一日の条に、「質屋定書」⁽³⁰⁾として三カ条見えるが、「日記」元禄八年六月十九日の条に左のようにある。

質屋作法御定之事

- 一、刀脇差諸道具諸品等ハ十三カ月切、
 - 一、衣類等ハ 八カ月切、
 - 一、錢貨百文ニ付、壹ヶ月四文宛之利足、
 - 一、金貳両以下ハ壹ヶ月⁽³¹⁾ニ付、利足四分宛、
 - 一、金拾両以下ハ壹ヶ月壹歩ニ付、利足三分宛、
 - 一、金百両以下ハ壹ヶ月壹兩ニ付、利足壹匁宛、
 - 一、金百両以上ハ右ノ積を以、利足下直ニ可有相對事、
- 右之定今度被仰付候上ハ、質置主請人ニ此作法書之通駁申渡、請人判置主判兩判取質取可申候、御定之切過候得はなかれ申候、尤利足濟申候ハハ、又借し可申候、勿論判形日切之用捨有問敷者也、

右御定書相渡候面々、

壱通 郡奉行

同 町奉行

同 青盛町奉行

同 鯨ヶ沢町奉行

同 広須御新田

同 深浦町奉行

右之通相渡之 同 十三町奉行 (傍註筆者)

これは質保管の期間と利息についての規定で、幕府法元禄五年十一月の「質屋作法御定之事」⁽³¹⁾に準じたものと思われ、数字が多少異なるのみで内容は同じである。また、この元禄八年の「質屋作法御定之事」は、同三年の「質屋定書」よりも整ったものといえる。

藩政期を通して弘前城下に於ける質屋数の変遷は不明であるが、「日記」寛政元年五月十日の条によれば、本町では減少して三軒になったとあり、文化二年には城下全体で十七軒知られる程度である。⁽³²⁾

利息は、二分半から二分にもどす(「日記」享保九年九月九日の条、同宝暦十二年九月十日の条)、三分から二分半にもどす(同寛政元年五月十日の条)、五朱引き下げて以前のように二分とする(同嘉永二年閏四月二十七日の条)と「日記」に見えている。したがって利息は二分と三分であつたといえよう。

城下の質屋は藩士の利用が多かつたと推定されるが、両者間に問題が多く生じてくるのは天明期以後であり、それは天明・天保の大凶作とも関係がある。⁽³³⁾ここでは質保管の期限についての法令から、質屋側に焦

点を合わせ両者の関係を考察することにした。

右述の元禄八年の「質屋作法御定之事」に見える質保管の期限は、衣類が八ヵ月に対し、刀・脇差し・諸道具等は十二ヵ月であつた。それが原則であつたと思われる。

「日記」文政十一年二月十九日の条に次のように見える。

一、三奉行申出候、町々質屋共、此節品物不相当之下直ニ取質いたし、猶また請質而已ニて取質見合候もの茂有之趣相聞得、融通ニ相拘候之間、右様之儀無之様町奉行に而申付候処、質品者八ヶ月限ニ而流品ニ致し候様、前々被仰付御座候得共、置主頼合に寄是迄廿ヶ月まで月延に致候処、左候而者此節錢配相成兼候之間、已来十三ヶ月限ニ而流品にいたし候様御聞届被仰付度旨申出之、前書月延之儀者内通之申合ニ御座候間、申出之通是迄之取質共十三ヶ月限ニ而流し品致候様、町奉行ニ而質屋とも江可申付奉存候之間、御聞届被仰付候様、左候得者其品物ニ寄、置主迷惑之筋茂可有之に付、御聞届之趣町奉行に質屋共江申付候日より三十日位見合、何連共挨拶無之分者流品ニ致候様、右之趣質屋とも江張紙致せ、町中江者名主共相触せ可申、(中略) 申出之通申付之、

右によれば、質入れした品は八ヵ月の期限切れで質流れにされたのである。品物の名称は具体的に判明してないが、元禄八年の「質屋作法御定之事」から衣類等であろうと推定される。それが内々に頼まれて期限が二十ヵ月(二十ヵ月になった始期は不明)までに延期されていた。このままでは質屋の営業に差し支えるので、十三ヵ月の期限にしたいという三奉行からの申出が認められたものである。

「日記」天保五年二月二十一日の条に、

一、町奉行申出候、惣質屋共申出候者、此節置質勝ニ而請質無之、錢手配難相成、繰合方六ヶ敷難渋ニ付、十三ヶ月相過候取質品之儀者、以前之通流品ニいたし候様被仰付度旨申出之、融通向難默止相聞得申候間、十八ヶ月相過斷無之分者、流品ニいたし候様被仰付候様、附紙之通申付之、

とある。これによつて、從來まで質保管の期限は十三ヶ月であつたが、十八カ月経過しても連絡がなければ、質屋が質流しにすることを認められたことが知られる。期限の延期は、前年の大凶作の影響による生活困窮を藩が考慮したからであらう。

「日記」天保五年六月五日の条によれば、質保管の期限はこれまで十三カ月であつたが、昨年の大凶作の影響により十八カ月に延ばしたところ、質入れする者ばかりで取り出す者がなく、質屋の營業に支障が出るようになった。そのため再び期限を十三カ月に戻すことにする。但し藩士の勤務にかかわる品（武具、衣類等か）は十八カ月の期限とする、と見える。³⁴

二年後の「日記」天保七年六月二日の条では、期限はさらに延び、この年まで二十カ月になつていたことが知られるが、また十三カ月に戻すことになつた。但し藩士の勤務にかかわる品物は、質屋に届出て手続きをすれば流れないように取り扱うという御目付触が出ており、二十カ月の期限はまだ有効であつたのであらう。³⁵

さらに「日記」天保八年三月二十九日の条に左のように記されている。

一、町奉行申出候、町中惣質屋共願出旧冬質品、当分之内流品ニ不致

候様被仰付罷有候由ニ而、質品限月之義再応書面之通、段々願出之趣難默止相聞得、殊ニ小者共追々困窮之場合、質屋共入錢之道外ニ付、心当無之、取質難相成趣ニ付、去申六月上旬御触出後、質入ならひ此節方質入品共、其節御触流之通、御家中勤務品者不及申其外下々ニ至迄要用之品等茂不得止事質入可有之義ニ付、斷相立候分者流品ニ不致候様、斷相立不申品之分者十三ヶ月限流品ニ致候様、左候者小者共用弁ニ相成候様、當時節柄勘弁之上取計取質致出情候被仰付候様、右之趣去六月御触流ニ相成候得共、此節ニ至必用品斷落茂有之義難計ニ付、要用品置質致候分者、右限月前無落向々質屋早速斷相立候様、改而御家中在町浦々江惣御触流被仰付候様、附紙之通申付之、
(傍註筆者)

右によれば、生活困窮に陥つてゐる藩士及び多くの人々が、質入れした勤務のための品や生活必需品に限り、予めその質屋に申し出れば、流されないが、それ以外は十三カ月が保管の期限であつたことが知られる。これは前年の大凶作による彼等の生活を救済しようとする藩の対応であつた。

四カ月後の「日記」天保八年七月三十日の条に次のように見える。

一、今日御目付触左之通、

覚

此度質返被仰付右質渡方之儀、永々相成候而者、質屋共難渋之趣相聞得候間、来月十五日迄皆済、質品受取候様被仰付、猶又札紛失之分者、是迄之通質座相対を以請人相立、品物請取候様被仰付候、此旨可被申触候、以上、

七月

御目付中

これは対象が不明だが、質入れしていた品物の返却である。質札を失った者がいるほどであるから長期間質入れされていたことが推定されよう。

この時期は藩財政の窮乏で、藩士に対しては面扶持制が実施されており、⁽³⁶⁾藩士が質屋に対する借金返済能力があったか疑わしい。むしろ、藩が質屋に対して何程かの金額を支払い、藩士等へ質入れしていた品物を取り戻させたと考える方がよいかもしれない。

以上述べたことから、質屋が品物を保管する期限は衣類等と推定されるが、八ヵ月から十二ヵ月に延長された。藩士の勤務にかかわる品物は十二ヵ月が原則であったと思われるが、後には十八ヵ月となり、その後申し出れば十八ヵ月の期限が切れても流されないことになった。それは無期限のような状態を意味しよう。但し、利息は二分〇三分で大きな変化はなかった。

自然経済を基盤とする藩財政は、藩政後期になるとますます窮迫し、藩士の生活困窮をまねいたことはいうまでもない。

そのため藩士は城下の質屋を利用することが多くなり、質入れた品物の保管期限がきても、借金を返済してその品物を取り戻すことが不可能な状態になっていた。藩では特に藩士の勤務にかかわる武具等については、期限切れでも質流れにならない処置をとり、彼等の救済をはかったのである。

このことは、質屋の営業に支障をまねき、苦しめることになり、質屋

と藩士の両者を立てる方策はなかなか困難であったことを示すものであった。

かくて、これらの法令は、質屋に対して藩士の生活困窮を救済するために犠牲を求めた面が強かったと思うのである。

四 防火・治安対策

江戸時代には防火・消火体制が整っていなかったため、火の用心には十分注意していても、ひとたび火災が発生すると大火になる場合が多かった。

弘前城下の三大火ともいべきものは、①慶安二年五月横町（東長町）からの出火で十数軒と五カ寺の焼失②延宝五年九月親方町より出火、八十五軒の焼失③延享元年五月本町から出火、大屋二百二十七軒と家中十二軒⁽³⁷⁾の焼失であった。江戸時代を通じて火災件数は枚挙に遑がない。防火については、藩士に対し寛文二年制定の十七ヵ条の第六条に「一、屋敷中ニ火事出来せし時は早速其所に馳け集り打消可申事」⁽³⁸⁾と見え、町人に対しては延宝九年の「町人法度」第四十二条〇第四十六条迄の五ヵ条が定められている。この規定内容から、火の用心と出火に際しての対処のしかたが知られる。

江戸には定火消・大名火消・町火消があり、諸藩の城下でも類似の消防組織があった。

津軽藩では、藩庁の消防組織として火消番があり、町火消の起源は寛政七年頃とされる（それ以前には町単位で消火にあたつた）⁽³⁹⁾

また江戸では辻番は武家が設置し、武家地内に置かれ、その地の警察

のことを担当した。

これに対し自身番は町役人が主に事務を担当するもので、自身番屋は町屋の端の片側に位置した。道路を隔ててその反対側の角に木戸番屋が置かれたが、木戸番屋の勤めは木戸の番と夜警が主で、時には自身番の使い走りもしたのである。⁽⁴⁰⁾

津軽藩の場合には、「日記」延宝六年二月十日の条に左のように見える。

夜廻勤之覚

(中略)

一、自身番辻門番無油断相勤候様に、其所々にて急度可申付事、

(中略)

(午)

二月十日

御手廻中

これは藩士の手廻組宛に出されたものであるが、辻門番は辻番のことと推定されるが実態が不明であり、また藩士も自身番を勤めていたことになろう。

「日記」元禄十年四月二十三日の条に次のように記されている。

木戸番人江申渡之覚

一、木戸日暮以後、^(提灯)灯燈不持者堅通シ申間敷事、所々之小夫或者灯燈不持者往来之節者、御定之札所持可致候間、改候而札ニ相違無之候ハハ通シ可申事、

一、番人之親類縁者ハ不及申、其町内或者知人たりと、灯燈不持者堅通シ申間敷事、

一、手負死人狼籍者、添番之立合堅通シ申間敷事、尤承届子細無之者

ハ早速通シ可申事、

一、理不尽ニ木戸通り可申与申者有之候ハハ、添番之立合押留、名主月行事江相達可任差図事、

一、若出火なと有之、大勢往来之節者、早速大木戸を開往來無滞様ニ可仕事、

一、馬上或者大きな物なとくぐり通り兼候ものハ、何品ニ不寄早速大木戸を開通シ可申事、

一、急病人杯有之罷帰度旨相断候ハハ、品により灯燈不持候もの其町所承届、添番之者自身番迄送届ケ、自身番其町内名主或者其主人江送り届相断可能帰事、

右之通急度相守候様ニ可申付者也、

丑三月廿三日

覚

一、毎度申渡候通、火之用心随分念を入、風烈節ハ昼夜ニ不限月行事家並ニ廻り、無油断可申付事、

一、若出火有之節者、兼々申渡候通急度相守、人足等之儀夫々承之場所江無遅々相詰候之様ニ可申付事、

一、自身番木戸番添番共ニ無油断急度相勤可申事、尤夜中往来之者灯燈不持者堅通シ申間敷事、

右之通先達而申渡候得共、御留守中猶以無油断相勤候様、支配配可申付候、以上、

丑三月廿三日

惣名主中

町奉行所

右之通町中江申渡候由、木村^(用人)奎之助江町奉行木村八左衛門申聞候、

(傍註筆者)

これは、町奉行から木戸番へ申し渡された勤務心得であるが、添番は木戸番を補佐する役割かと思われる。

木戸については、すでに延宝九年の「町人法度」第三十一条に、朝夕の木戸の明けたて、盗人があつた時に合図しだい直ちに木戸の検査をすること、破損した際の修理についてなどの規定が見える。

慶安二年頃のものという「弘前古絵図」によれば、城下に六十一カ所の木戸が認められる。⁽⁴¹⁾

「日記」文化三年十月八日の条によれば、左のようにある。

一、頃日町々御用心向不宜旨相聞得候、自身番之者共夜中廻り方緩せ之趣共相聞得候、御用心向御^(ママ)太切之義候間、手木番之ものとも小路々迄も無間断相廻候様、此旨急度可被申付旨町奉行江申遣之、

(傍註筆者)

右によれば、自身番が、夜廻りをしていたことがわかる。

八戸藩では、江戸の辻番・自身番のような区別はなく、ある時は辻番、ある時は自身番と称され、恒常的な施設として常置されたものではなかったという。⁽⁴²⁾

以上のことから、津輕藩では辻番については不明であるが、木戸番と自身番の職務と役割が明確に判明していないとしても、防火と治安対策としての両者の夜廻りの実態は同じであったと考える。

次に幕末まで頻出する防火と治安に関する具体例をあげてみたい。

「日記」宝暦十二年四月十五日の条によれば、次のように見える。

一、今日当番通用左之通、

覚

此間土淵川ハッ目取之者、夜中桃灯^(提)并に明松^(松明)持候而、大円寺辺より百石町下北横町辺まで数多往来致候付、火之元御用心向不宜候段相聞得候、右躰之儀無之様此間当番通用可被申触旨御目付江申遣之、

(傍註筆者)

土淵川は久渡寺山を水源とし、弘前城下を北流して平川に合流する。大円寺辺より百石町下北横町辺とは、土淵川が城下を流れる部分である。この地域で提灯や松明を持参して八目鰻を捕獲することは防火上危険であるから禁止するというものである。

土淵川での八目鰻取りはいつ頃から始まったのか不明ではあるが、捕獲の禁止令は宝暦期以後幕末迄枚挙に遑がないほど出されている。これは深夜に提灯と松明を持って、城下を歩くことに對する防火上の規制であったと考えられる。

既述した元禄十年の「木戸番人江申渡之覚」によれば、夜に木戸を通り抜けるためには、札(通行証)を提示し、それによって通行が許可されるのが原則であった。

「日記」天明三年五月一日の条には、青森町に於いてしとみ頭巾で顔をかくし、昼夜にかがらず忍び通る者があり、召し捕えるように。と命じられている。

「日記」文化二年八月二日の条に左のようにある。

一、今日大目付触左之通、

覚

頃日町々用心向之儀稠敷申付候間、御家中并町家共申合、用心向忽諸無之様に往来之者無桃灯ニ而懂敷躰之者名前等役筋之者相尋候得者、却而不法之申分等有之趣ニも相聞得、御締合不宜候間、御家中并町々共急用ニ無之部者、無桃灯に而夜中往来不致候様、尤不得止事往来之節者、役筋之者より名前相尋候者、早速相名乗罷通候様、此旨惣触可被申触候、以上、
(傍註筆者)

八月

大目付中

右によれば、提灯を持参せずに城下を通行し、役人が名前を尋ねても不法な態度をとる者がいる。藩士・町人は急用でなければ、提灯を持たずに往来しないこと。やむを得ず無提灯で通行し、役人から名前を尋ねられた時は、直ちに名乗るようになるという触である。

このような触は、文化期頃以降に頻出するようになる。防火と治安維持のための法令が多く出されていることは、城下の治安が次第に悪化してきたことを意味するものと考ええる。それは城下に住む藩士が生活困窮により武具等を質入れせざるを得ず、藩士が封建軍団として社会の秩序を維持できない状態にまでなっていたことと、深く関連している⁽⁴³⁾と思うのである。

むすび

以上、本稿で明らかにしたことをまとめると次のようになる。
第一に町人に対する生活規制については、延宝九年制定の「町人法度」

は藩政確立期の所産であり、町人統制の基礎となる基本法ともいえるべきものであった。衣食住を中心とする法令では、寛政二年・享和三年・文化四年・同八年のものは津輕藩の寛政改革の一環としての、天保十二年・弘化三年・嘉永六年のものは天保改革の一環としての、町人に対する奢侈を抑制するための儉約令であったといえよう。それは階級社会に於ける身分秩序の維持のためであったと考えられる。

第二の衣食住については第一の各説にあたるが、衣服の規制は、

1、詳細なものは寛政二年以後に出されている。それは次第に経済的実力を備えてきた町人に対する奢侈を抑制するための儉約令であった。

2、この規制は藩士・農民・町人間の身分秩序を維持するためであったこと。

3、有力町人と一般町人とを区別する規定が見られたことは、町人階級内の階層秩序をも維持するためであった。

4、町人に対する規制が、農民に対する規制よりもゆるやかであったように思われる。

5、藩財政の窮乏打開のために行われた藩政改革は、財政面で町人に大きく依存せざるを得ず、そのため衣服規制は崩れ、幕末には身分秩序が崩壊に瀕するに至った。

食事については、平常と冠婚葬祭のような特別の場合でも、同様に一汁三菜とするよう規制されている。これは儉約の観点から出されたものであるが、堅くは守られなかったと推定する。また食事は衣のように人の目に具体的に見えない場合が多く、身分秩序のためには効果的でなかったと思われる。

住居の規制については、町人の奢侈を抑えるための儉約令であり、同時に身分秩序維持と町人階級内の階層秩序を維持するためでもあった。

第三の年中行事では、宵宮の催し方は質素儉約を心がけ、風紀を乱さないよう規制された。

盆踊りの規制は、服装の華美を慎しむ儉約令であり、また女性の参加は町人以外に認めなかったことは、風紀の乱れの防止と身分秩序維持のためであった。

ねぶたの運行は町人の行事である。やがて藩士のほかに女性も参加し、喧嘩も始まるようになり、ねぶたへの規制は風紀の乱れを防止することになった。

お山参詣に対する規制は、華美な服装に対する儉約令であると同時に、女性を判う登山と下山後に酩酊して自制心を失った行動に対する、風紀の乱れを防止するためであったと考えられる。

最後は日常生活であるが、城下の通行については、藩主の行列が通る際に、近くを往来していた町人・藩士は、家の戸を閉めて隠れ慎しむことを命じられた。また町人が路上で藩士に出会った時には、跪いて挨拶をしなければならなかったのである。このような規制は身分秩序を維持するためであったと考えられる。

商業については、城下の本町の繁栄をはかる法令は、藩財政維持のため豪商を保護しようとするものであった。また物価引き下げの法令及び隠商に対する過料定は、藩士の生活が商品経済に巻きこまれて藩体制が揺らぐことを防止するため、町人の経済活動がある程度抑えようとした面があったものと考えられる。

城下の質屋は藩士に利用されることが多かったと思われる。藩士は質入れた品物の保管期限がきても、借金を返済してその品物を取り戻すことが不可能な状態になっていた。藩では特に藩士の勤務にかかわる武器等については、期限切れでも質流れにならない処置をとり、彼等の救済をはかったのである。かくて、質屋に対して出された法令は、藩士の生活困窮を救済するために、質屋へ犠牲を求めた面が強かったと思うのである。

防火と治安の維持については、町屋には木戸が設置され、木戸番・自身番が夜廻りをしていた。魚とりのため深夜に城下を提灯や松明を持ち歩くことに対しての規制、また提灯を持たずに怪しげな姿で通行する者に対する規制が藩政後期以降頻出してくるのは、城下の治安が次第に悪化してきたことを意味するものと考えられる。それは城下に住む藩士が生活困窮により武器等を質入れせざるを得ず、藩士が封建軍団として社会の秩序を維持できない状態にまでなっていたことと深く関連していると思うのである。

註

- (1) 拙稿「法令より見たる津輕藩士の生活―衣食住を中心として―」(「弘前大学國史研究」第八十六号)を参照のこと。
- (2) 『青森県百科事典』(東奥日報社 一九八一年)九三二頁。宵宮の項
- (3) 弘前市立図書館蔵。「江戸日記」と「国日記」の二種類あるが、本稿では後者を指すものとし、引用する場合は「日記」と表現する。

(4) 註(1)参照

(5) 『弘前市史』藩政編(弘前市 一九六三年) 六九五頁

(6) 「日記」元禄七年七月十二日の条に見える「盆中町々江申渡之覚」の中に「一、町中之木戸前々之通、盆中從十三日之夜同十六日夜之九迄開(下略)」とあり、晩と夜はここでは時間的ニュアンスはなく、同じ意味に考えたい。

(7) 註(2)七〇四頁。ねぶた・ねぶたの項

(8) 註(5)六九七頁

(9) 藤田本太郎『ねぶたの歴史』(弘前図書館後援会 一九七六年)二九頁

(10) 同 右 五一・五二頁

(11) 同 右 一二六頁

(12) 註(2)一二二頁。お山参詣の項

(13) 小館衷三『岩木山信仰史』(北方新社 一九七五年) 一六〇頁

お山参詣は「法令より見たる津輕藩の農民の生活」(未刊)の論文で記述すべきと思うが、便宜上ここに入れた。

(14) 青森県立図書館郷土双書 第五号(一九七三年) 五五・五六頁

(15) 品川弥千江『岩木山』(東奥日報社 一九六八年) 九五・九六頁に、明和六年八月に出された代官の覚に、華美な服装をしてはならない、ということが見えるが未見である。

(16) 盛岡藩では天保八年二月四日に、(藩法研究会編『藩法集 9 盛岡藩 下』創文社 一九七〇年・一九〇・二九一頁・二六六頁)「(上略)一、殿様・若殿様御通行之砌、(中略)下タニく

と斗厳格ニ相制可申候、(中略)一、御家門方并御席詰御大老・御家老出仕之砌、(中略)以来作法声十声斗え、下タニ居レと一声制声相懸可申、(下略)」と見え、津輕藩と多少異なるようである。

(17) 農民については註(13)に記した論文で述べる予定であり、ここでは言及しないことにする。

(18) 註(5)五〇頁

(19) 註(5)七三二・七三三頁

(20) 註(1)参照

(21) 『青森県の地名』(平凡社 一九八二年) 四九二頁

(22) 長谷川成一編『弘前城下史料』下(北方新社 一九八六年) 七二・八五頁

(23) 『みちのく双書』第十六集(青森県文化財保護協会 一九六五年) 二四一頁

(24) 『みちのく双書』第二十二集(青森県文化財保護協会 一九六七年)

(25) 弘前大学国史研究会編『津輕史事典』(名著出版 一九八二年) 一八〇・一八一頁

(26) 「日記」同年月日の条の方が詳細であるが、それを要約した「御用格」(弘前市立図書館蔵)を使用した。

(27) 「日記」に記載されていない。

(28) 八木橋文庫蔵。なお、寛政五年の規定十六カ条の内容は、『弘前市史』(藩政編)―註(5)参照―三九七頁に紹介されており、合計二十二カ条は長文にわたるので省略した。

(29) 弘前市立図書館蔵

(30) 註(27)に同じ。

(31) 『徳川禁令考』(創文社 一九五九年)第二九五九号 前集第五 二六二・二六三頁

(32) 『文化二年八月改 弘前町中人別戸数諸工諸家業總括 全』(長谷川成一編『弘前城下史料』上)北方新社 一九八六年V一四五頁所収)

(33) 註(1)参照

(34) 同 右。「日記」天保五年七月十二日の条にも、ほぼ同内容のものが見える。

(35) 註(1)参照

(36) 註(5)八一五頁

(37) 註(25)一八一頁。註(5)一二七頁では二三四軒とある。

(38) 蝦名庸一「津軽信政時代における法令の整備」(『弘前大学國史研究』第二十三号)。条文は菊池元衛編『津軽信政公事續』(非売品 一八九八年)、「御定法古格」(弘前市立図書館蔵)を参照して掲載する、と見える。

(39) 註(5)一七六頁

(40) 松平太郎『訂校江戸時代制度の研究』(柏書房 一九七一年)五六四頁。笹間良彦『江戸の司法警察事典』(柏書房 一九八〇年)一八四〜一八八頁

(41) 『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』(弘前市立博物館 一九八四年)一〇頁。註(5)八〇頁では四九カ所とある。

(42) 高島成侑・三浦忠司『南部八戸の城下町』(伊吉書院 一九八三年)

三〇〇頁

(43) 註(1)参照